

日本では亡くなった人を「仏」と呼び、誰でも亡くなれば仏（ホトケさま）になるという考えや死後に極楽浄土に行くことが「成仏」であるというイメージが定着しています。

宗門の僧俗差別と戦う中で、私たちはあらためて「即身成仏」の意義を確認することができました。今回は大聖人直結の信心こそ、成仏の直道であることを論じます。

宗門問題により明確になった成仏の意義

今回の論点

1. 釈尊を神格化し、成仏は難しいと説いた出家者たち
2. 日蓮大聖人は、成仏の「成」は「開く義なり」と説かれている
3. 葬儀と成仏を結びつけ、大聖人直結の信心に介入しようとする僧侶たち
4. 創価学会により証明された「即身成仏」「一生成仏」の教え

1、 釈尊を神格化し、成仏は難しいと説いた出家者たち

原始仏教の経典には、釈尊の覚りについて「即時に効果の見られる、時を要しない法」「まのあたり即時に実現され、時を要しない法」と書かれています。このことについて中村元氏は「この文から見ると、ニルヴァーナは即時に体得されると考えていたのである」（『ブツダの言葉』）と述べています。「ニルヴァーナ」は「涅槃」を指し、悟りの智慧（菩提）を完成した境地を言います。すなわち、釈尊は「即身成仏」を説いていたこととなります。

ところが部派仏教の時代になると、釈尊を神格化して、偉大な人格は今生だけの修行で完成されたものではなく、過去の多数の人生での修行に基づくものとされました。そこから、何度も生まれ変わって、極めて長時間に渡る「歴劫修行」が必要になると説かれるようになったのです。そして同時に、その偉大な釈尊に近づけるのは出家者だけであると、出家の優位性・権威が作られたのです。

2、 日蓮大聖人は、成仏の「成」は「開く義なり」と説かれている

釈尊は誰でも、覚りを得て仏に成れることを示しました。そして大聖人は“覚りを得る”修行として、法華経に説かれた根源の法である「南無妙法蓮華経」を唱え、自行化他の実践をすることを説いたのです。

法華経以外の諸経では「歴劫修行」が説かれていましたが、法華経では、万人にそなわっている仏界を開き現すことで、この身のままで直ちに成仏できる「即身成仏」が説かれました。

成仏の「成」について、「御義口伝」には「成は開く義なり」とあります。唱題によって自らの仏界を開いていくことが成仏なのです。

ところが法主の日蓮は「お題目を唱えて、我々の仏界涌現、仏界涌現っていうんだ。これ

はまさしく大謗法だ」(平成6年8、全国教師講習会)と、大聖人の根本の教えを否定しているのです。

3、 葬儀と成仏を結びつけ、大聖人直結の信心に介入しようとする僧侶たち

宗門は「僧侶の引導がなければ成仏しない」「戒名がなければ成仏しない」等々、僧侶抜き
の葬儀では信徒は成仏できないと主張しています。このような考えは江戸時代の「檀家制度」
で定着したものです。

檀家制度では、僧侶は檀徒の死後、死相を見届け、檀徒であることを確認して、戒名を授
け、引導を渡すことが義務づけられていました。檀徒は、僧侶を呼ばなければ、キリシタン
の疑いをかけられ、刑に処されるという恐怖から、必ず葬儀に僧侶を招いたのです。

宗門が死後の儀礼をさかんに成仏と結びつけようとするのは、そこに自分たちが介入でき
るからです。唱題をして成仏するという修行には、僧侶は必要ありません。彼らが恐れている
のは、大聖人直結の信心により、自分たちが必要ないと思われることです。それを防ぐた
めに、宗門は差別を設け、自分たちの必要性を作り出しているのです。

4、 創価学会により証明された「即身成仏」「一生成仏」の教え

創価学会が誕生した頃、昭和14年の文部省宗教局調査を紹介します。

日蓮正宗の寺院数は75カ寺 住職数は52名

日蓮宗各派の寺院数は4962カ寺、住職は4451名

宗門がいかに小さな集団であったか分かります。この頃、宗門の檀家のほとんどは、折伏
はおろか勤行・唱題もしていませんでした。

宗門では法主が就任した記念に、御本尊を書写します。そして供養をした檀家に授与して
いました。ですから、古い檀家の家には多くの法主の御本尊があります。法主が折伏のため
に御本尊を書写するようになったのは、創価学会が誕生し、折伏を開始してからです。

宗門では唱題行を軽視していました。その証拠に法主の日頭は以下のように述べています。

「三十分ぐらい真剣に行くことはよいと思うのであります。しかし、それ以上は、多すぎる
ことになってかえって弊害があります」(昭和59年8月 行学講習会)

すなわち、創価学会が誕生する前の宗門では、檀家も僧侶も折伏や唱題をしていなかった
のです。その結果、700年経っても小さな集団のままだったのです。

創価学会は大聖人直結の信心で「即身成仏」「一生成仏」の実証を示し、世界に日蓮大聖人
の教えを弘めてきました。そこに僧侶の介在は必要ありませんでした。ところが法主・日頭
は「ワシが許可した」と言っていたのですから、呆れたものです。

今、宗門が行っている活動は、創価学会のマネでしかありません。しかし学会員の真剣さ
がないため、折伏の目標はノルマとなり、数をゴマ化して多くの住職が処分されています。

今回は「宗門問題により浮かびあがった衣の権威の正体」というテーマでお届けします。